

第2回 徳島市文化振興ビジョン策定のための市民会議 会議録

日 時 平成 28 年 2 月 1 日（月） 午後 2 時半～午後 4 時半

場 所 徳島市役所 5 階会議室

出席者 19 名（委員 10 名、事務局ほか）

1 開会

2 議事 (1) 徳島市文化振興ビジョンの構成について

事務局から資料 1 について説明

A 委員： 第 1 回の会議で、地方創生と絡む形にするという話があったが、地方創生についてはどの部分で触れられるのか。また、地方創生も含めて検討して良いのか。

事務局： ビジョンの中で、「策定の趣旨」として記載したいと考えている。地方創生も含めてご意見をいただきたい。

B 委員： 構成案で示された考え方にに基づき、どのような取り組みをしていくのかという具体策については、推進体制に任せるといふ考え方なのか。

事務局： 推進体制については、文化施設の指定管理者を含め、徳島市内の様々な文化団体などとともに取り組みを進めていきたいと考えている。第 3 回の会議で、基本方針や取り組みの具体例を示し、委員からご意見をいただきたいと考えている。

2 議事 (2) 徳島市文化振興ビジョンで扱う文化の範囲等について

事務局から資料 2 について説明

C 委員： 伝統的な文化が残る街並みなどは、文化に該当するのではないかと。

他には、戦前から続く阿波しじら織の機織り工場が稼働しており、産業遺産といえる。その他、モラエス、林鼓浪さんや松江豊寿さんなどの人物の顕彰を引き継ぐことをどう考えるか。

文化振興なのか、社会教育なのかの線引きが難しい部分について、どう考えていくべきか。

D 委員： この資料では、どちらかというといふ余暇活動などと呼ばれているものを文化としている。黒田委員がおっしゃったのは、「生業文化」と言われているような生活に近い文化のことだろう。

木工も今では衰退しているが、徳島市にとっては貴重なものである。そうい

った市民が日常的に目にしているものは馴染みやすい。また、市内には小さな町工場があり、全国的にみても質の高い商品を製造している。そのようなものと文化がリンクしないのは勿体無い。

会 長： 有形的な遺産としての街並み、生業として今まで継承されているものなども、地域の文化としての位置付けが可能かと思う。

ただし、人物については、書かれた著書等は文化として残るが、網羅できないものもあるだろう。また、先人の顕彰は、歴史の継承なのか、文化なのかということもある。

B 委員： 以前に、県が国民文化祭を行った際には、藍染が文化に入っていた。特に徳島なので、藍染は文化に含める必要があるかと思う。このような産業文化的なものや街並みも、文化に含めてほしい。

個人的には、人物は含めなくて良いのではないかと思う。

会 長： 前回の会議でも徳島市の特性としての文化は、ビジョンにおける文化の範囲に含まれていく、という趣旨のご意見が出されていた。

資料では、国が定める文化を示してあるが、徳島市に息づいている文化を取り入れることがあって良いと考える。

ただ、この文化の範囲の中で、全てのジャンルを網羅することは難しい。事務局の考えはあるか。

事務局： 国が定めた文化の範囲を基に、「徳島市の文化」について、ご意見をいただきたい。

E 委員： 文化振興ビジョンは、誰が読んでも理解できる書き方にしたほうが、市民の理解を得やすいだろう。

以前に市で決めた「とくしま市民遺産」にも、古い石垣の道などが出てきている。また、市民遺産を募集したときに寄せられた市民意見も、何らかの形で文化として位置付けられればと思う。

F 委員： このような分類では、含まれないものがたくさん出てくるのではないか。

また、書道を生活文化だけでなく、芸術と考える方もいる。文化財もひとつの形の財であるし、街道などの文化遺産もある。

文化の中に、「今までのもの、今のもの、将来のもの」がある。文化芸術振興基本法を基にするだけではなく、徳島らしさが出て良いのではないか。

会 長： 行政的に考えると最上位の概念から体系的に分類することが多くなる。そうではなく、市の現状から文化を幅広く捉えて検討したほうが良いだろう。

F 委員： ビジョンは、「10年後にどうありたいか」という目標があり、それに達するには10年間の間に何をしたら良いのか、ということを考えなければならない。

会 長： 「10年後の徳島の姿」を目指すための取り組みが大切である。取り組み内容によっては10年では足りないこともあるかもしれない。それぞれの内容に応じた期間設定にすることも考えられる。

2 議事 (3) 本市の文化・芸術活動の特性及び現状と課題について

事務局から資料3について説明

会 長： 資料は、「本市の文化・芸術活動の特性及び現状と課題について」となっているが、文化芸術は活動だけに限られないので、「活動」は削除したほうが良いのではないか。

G 委員： ビジョンの構成の「策定の趣旨」で、人口減少等に触れられているが、一番の課題は、地域コミュニティが衰退しているということである。地域の文化というならば、地域コミュニティを取り戻すという考え方もあるのではないか。

D 委員： 「策定の趣旨」に地域間競争が入るのはどうかと感じた。シティプロモーションの手段や、地域間競争は行政課題である。行政課題の解決手段として文化を用いることは、ずれているのではないか。

また、課題に「様々な分野と連携した文化芸術活動の実施」と書かれているが、市民感覚からすると、自らのやりたい活動を行っているだけであり、連携は目的でなく実現するための手段である。一般的な市民生活を想定して考えても良いのではないか。

文化は、「こういう方向」と考えるものではなく、「場」があって、そこで主体的につくられていくものである。計画としては、その「場」を用意するまでで、あとは醸成されるのを待つしかないのではないか。

会 長： まちの活性化のために文化を利用するのはどうなのか、という意見であるが、一方で、観光、交流、集客という面では、様々な文化的資源が注目されているのも現実である。

文化芸術を活用した経済的な効用と、コミュニティとしての文化の整理が必要かもしれない。

最近では、震災復興における地域の祭りや文化的取り組みの果たす役割や効能が、壊れたコミュニティの再生に役立つということが注目されている。

H 委員： 文化の範囲に、食文化は入るのではないか。また、地域コミュニティとしての文化には阿波藍は欠かせない。

経済的に徳島に人を取り込むための文化と、地域コミュニティとしての文化という2本の柱立てで考えていかなければいけないと感じた。

会 長： 文化の効用のうち、「人と人を繋いでいく」という面と、「地域の活性化に資する」という、大きく二つの方向性で整理していく手もある。

その部分を整理したほうが、今後、理念や施策の取り組みを体系的に考える上で有効であると思う。

A 委員： 市には「将来どうやって文化を振興させていくのか」というビジョンがあるべきであり、我々もそれを共有して議論する必要がある。行政が取り組むべきことと、市民が心掛けることは違う。

徳島市らしいものを目指そうとすると範囲が広すぎる。文化の範囲をもう少し狭めて、徳島市らしいものに絞っても良いのではないか。大都市の水準に合わせることはやめたほうが良い。

F 委員： どのような結果が出たら「文化が発展した」と捉えるかが問題である。
多くのジャンルの催しが増えることなのか、多くの人が催しに携わり心身や生活が豊かになることなのか。その両方がある、「文化の発展」と言えるのではないか。

ある部分では、レベルの向上も必要だが、多くの人が広く携わったり鑑賞したりして、生活に楽しみを見出すことが文化だと思う。

また、結果をどう判定するのか。今後、どのように推進していくのか。指導者の育成や、将来携わる人材を増やすということも必要になる。

会 長： 評価については難しい部分であり、取り組み体制等の検討課題でもある。

F 委員： 都会でオペラなどの文化を鑑賞した経験がある人は、地方に移住してきた場合でも、その地域で鑑賞している。一方で、鑑賞した経験がない人は、行きたいと興味を持っていても気後れしてしまう。徳島では、まず、「経験する」という場をつくる必要がある。

会 長： 徳島市の特徴とされる文化を把握するのも難しい。もう少し具体性やデータの裏付けも欲しい。

事務局： 市民アンケートが実施できないか検討している。調査項目に対する意見があればいただきたい。

G 委員： 文化に対する市民の認識は知りたい。

B 委員： 「文化振興の環境整備」において、新たなホールをどう文化振興に活用していくかが重要である。新ホールの活動については別途委員会などがあるのか。

会 長： 新ホール管理運営計画策定のための市民会議において、新ホールの管理運営計画がまとめられている。

新ホールは今後の文化振興において重要な場所となる。新ホールの管理運営計画だけで完結させるのではなく、文化振興ビジョンのみを読む人にも理解できるように書くことは大切である。新ホールは文化振興ビジョンの特性にもなる。

文化振興の主体が市だと、どうしても固くなる。主体には市民、文化・まちづくりにかかわるNPOや社会的関心の高い企業などもある。

文化振興ビジョンの主体はどこか。文化行政振興ビジョンなのか。市民やNPOや文化に関係する企業も一緒に取り組むべきビジョンなのか。視野を決める必要がある。

A 委員： 行政が、「文化のまち徳島」と打ち出せば、市民の文化に対する意識も変わってくる。市が積極的に文化振興を行う姿勢を示してほしい。

文化センターの閉館から、新ホールの開館までに何年もかかるという状況で

は、市が文化に重きを置いていないと理解する。

まずは市がしっかりとした覚悟をもち、その姿勢が市民に伝わらなければ、他の市には太刀打ちできない。

- F 委員： 文化センターが閉館になり、ホールを利用できないことの影響は大きい。
- 会 長： 徳島市の本気度が、この文化振興ビジョンで試されることになる。文化の推進を図らなければならない。
- I 委員： 先日、大学の学科で初めて阿波十郎兵衛屋敷に行った。実際に観ると面白いと感じた。このような文化に触れる機会が少ない。面白いと思える文化があるのにもったいないと感じた。
- E 委員： 人形浄瑠璃も、出前公演として学校へ行ったり、放課後授業で取り上げてもらったりと、取り組みを工夫している。
- また、阿波十郎兵衛屋敷はこれまで観光施設としての側面が大きく、県外からの観光客が多かった。これからは、地元の人に良さを知ってもらい、リピーターを増やしたい。
- B 委員： 徳島市内の小中学校で、どこかの年次には必ず人形浄瑠璃を鑑賞しに行くなどの取り組みを、行政は考える必要がある。
- F 委員： 東京では中学生が歌舞伎座公演を鑑賞できる取り組みもある。まずは徳島市内だけでも、卒業までに1回は人形浄瑠璃を見せるということをやりたい。
- 会 長： 文化の効用として、生きる力や普遍的な人間としての基礎を培うということがいえる。近年、子どもの貧困などが問題になっている。十分に文化に接触することができない子どもも多い。市民が普遍的に文化を享受できるという意味合いも入れたい。
- D 委員： 義務教育期間中に遠足で行けると良い。
- 地元の文化に触れる機会をつくれるか、人間教育を義務教育の中にどう組み込んでいけるか、市の覚悟を示せると良い。

2 議事 (4) その他

なし

3 閉会

以 上